

MATHEMATICAL SCIENCES NEWS

数理NEWS
2025 - 2
vol.55



■ 巻頭言

小林 俊行

大学院数理科学研究科 副研究科長

■ 研究NEWS

今野 北斗

大学院数理科学研究科 准教授

■ 退職教員からの言葉

■ 受賞

■ 新任紹介

■ 人事NEWS

■ TOPICS

高木レクチャー

公開講座

NISSAY Lecture Hall

広報室の活動

大学院生の活動報告



十八歳の春

小林俊行 大学院数理科学研究科副研究科長

探し物をしていたら、引き出しの奥から一枚の黄ばんだ紙が現れた。勢いのある筆致で次の二文が紙一杯に大きく書かれている。

数学は一つの問題を一週間でも一か月でも考える事ができる
ということが大事である。
知識はあとからいくらでもつく。

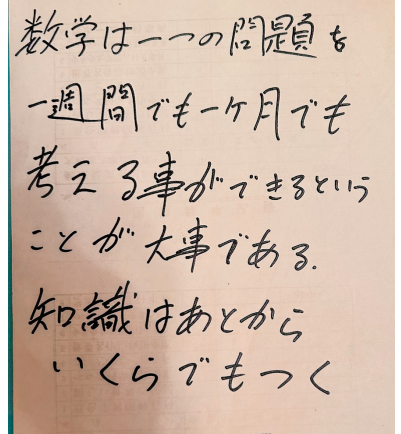
十八歳の私の字であった。

東京で下宿を始めて一か月ほど経った頃、本郷キャンパスの五月祭に足を運んだ。数学科の展示は、模造紙に二十題ほどの問題が並ぶという、実に素朴なものだった。一題解くごとに「東京大学数学科」と刻印された鉛筆が一本いただけという。私は学園祭のあいだ、その問題群に没頭した。解き終えて展示場の四年生に報告すると、「これらの問題の多くは三年生の古田君が作った」と教えられ、紹介していただいたのが古田幹雄さんである。自分の解答を説明して鉛筆を二箱いただき、そのあと、勇気を奮って数学の学び方を尋ねた。

古田さんは当時すでに数学界で名の知れた存在で、小学生のころランドセルに高木貞治著『解析概論』を入れていた、という逸話まで語られていた。高校時代の私はスポーツこそしていたものの、数学については『解析概論』という書名すら知らず、大学数学の知識など皆無であった。そんな十八歳の春に、「知識はあとからいくらでもつく」という言葉は、焦りがちな心をそっと支えてくれた。また、「一週間でも一か月でも考え続ける」姿勢は、十代のうちに自然と身についた大切な習慣となった。

それから六年後、私は修士課程を終えて東大に奉職し、以来四十年近くの大部分を、古田さんと同僚として多くの時間を過ごすことになった。十八歳のときに憧れた古田さんの言葉はいまも座右の銘である。一方、同僚となってからは、古田さんが私の院生セミナーに出席された折に「小林さんのセミナーは薫風を感じます」と言われて驚いたことがある。またある日、古田さんのオフィスを訪ねた際、拙文『創造力の源泉』（時に沿って・教養学部報）のコピーが黒板に貼られているのを見て、あらためて驚かされた。どこかで、続いていくもの、つながっていくものを感じてくださったのかもしれない。

春になると、希望と不安を胸に抱いた新入生たちが一斉に駒場キャンパスに現れる。その姿を見るたび、自分自身の十八歳の春がふとよみがえる。冒頭の紙片は、当時三年生の古田幹雄さんの言葉を、下宿に戻るやいなや書き留めたものである。十八歳の春に古田さんからいただいた言葉が私を励ましたように、いま春を迎える後輩たちに、少しでも未来への光となる言葉を手渡せればと思う。



研究ニュース



2025年度日本学術振興会賞

今野北斗

大学大学院数理科学研究科 准教授

標記の受賞にあたり、学生時代の指導教員である古田幹雄先生をはじめ、お世話になった多くの方々へ心より感謝申し上げます。

前号と前々号の「数理ニュース」にて、自分の研究そのものについては既に随分と書かせていただきました。今回はもう少し廻り、4次元多様体論とゲージ理論について、個人的に不思議に思うことや雑感を綴らせていただきます。

多様体の分類理論を振り返るところから始めます。1次元、2次元の多様体の分類は古典的で、3次元多様体の分類はPerelmanによる幾何化予想の解決により一定の見取り図がある状況です。4次元を一度飛ばして、高次元（5次元以上）に目を向けます。高次元多様体の分類は、1960年代末に一つの達成をみしました（Kirby-Siebenmann理論）。ここでは、高次元多様体の「原理的な」レベルでの分類が行われました。比較的簡単な多様体、例えば次元が余り高くない球面の上の微分構造は、もっと前にKervaire-Milnorらによって文字通り完全に分類されています。例えば S^7 上の微分構造は28個あることを聞いたことがある方もいるかもしれません。

高次元多様体の分類の証明の筋道を極めて大雑把に言えば、「幾何学の問題を代数に帰着させる」という類いのものです。これができる鍵は一種の手術の方法で、Whitneyのトリックと呼ばれます。その本質は、部分多様体を2次元の円板に沿って滑らせることによる部分多様体同士の交叉の解消です。幾何学的な複雑さの源

であった交叉を解消することで、物事が綺麗な代数の世界に帰着する、というのが大まかな気持ちです。5次元以上の多様体を考える限りであれば、適当な条件の下で、自己交叉のない埋め込まれた円板を見つけることができます。一方4次元になると、 $(4=2+2$ なので!) 一般の位置の議論で2次元円板の自己交叉を解消することはできず、上の議論が破綻します。このため、「幾何学の問題を代数に帰着させる」議論が4次元では使えないのです。

しかしこれはあくまで、高次元で有力であった一つのテクニックが使えないということです。高次元とは全く異なる手法により、4次元でも幾何学の問題を代数に帰着させることができる可能性が原理的には残されているように思えます。しかし、Donaldsonによる1980年代初頭のゲージ理論の導入は、この期待は全く正しくないことを明らかにしました。すなわち、Whitneyのトリックを証明中に用いる高次元での重要な定理の4次元類似が複数、ゲージ理論を用いて反証できるのです。（私自身の仕事のいくつかも、このタイプの結果です。）

ゲージ理論は、4次元多様体の上でないとそもそも立式もできない特別な偏微分方程式を用いて、4次元多様体の微分構造に関する情報を捉える技術です。細かい点を一切省いたとしても、上で紹介したWhitneyのトリックとは全く関係ないように見えることが窺えるかと思います。なぜ偏微分方程式に基づく解析的な色彩の強いゲージ理論が、極めて幾何学的なWhitneyのトリックの破綻に伴う4次元の複雑さを捉えているのでしょうか？この根源的な不思議さは解消されないまま今日に至っています。

ここからはさらに雑感ですが、ゲージ理論が4次元の不思議さを全て捉えているとも到底思えません。私には、4次元の幾何学の世界は、ダークマターで満ち満ちている宇宙のように感じられます。

ゲージ理論は宇宙に向けられた観測装置のようなものです。ゲージ理論における新しい道具が手に入るたびに観測できる場所が増えますが、宇宙全体が分かるのとはほど遠い、というのが実感です。最近、例えばKhovanovホモロジーの発展に基づいて、ゲージ理論以外の4次元の「観測装置」も登場しています。それでもやはり、底知れない闇の中にある氷山の一角を削っているという感覚は拭えません。

ひとつ例を挙げます。位相4次元多様体の上にはしばしば無限個の微分構造が入ることがゲージ理論により分かっています。コンパクト性の仮定の下では、これは4次元特有の現象です。しかし、微分構造が全く入らない場合を除き、位相4次元多様体でその上の微分構造が完全に分類されているものは、まだ一つも見つかっていないのです。 S^7 上の微分構造の分類が1960年代初頭に終わっていたことを思い出すと、如何に我々の4次元の理解が乏しいかが実感されるのではないのでしょうか。

尤も、上手く問題を設定しなければ大抵の数学の問題は難しい

というのは分野を問わない事実でしょう。そのため、人間に手が付けられる領域を見極め、そこをくまなく調べ、可能ならば徹底した理解（例えば完全な分類）を目指すというのが数学における通常の展開です。例えば何らかの「安定化」を行った対象を分類する、というのがしばしば見られる良い問題設定です。しかし4次元可微分カテゴリーの場合、安定化すると問題が簡単過ぎてしまったり（例えば古典的なC. T. C. Wallの結果）、そもそも安定しなかったり（例えばLinと私のホモロジー的非安定性）、十分面白くかつ何らかの完全分類が可能な領域を見つけるのが極端に難しいのです。

Donaldson以降、我々は4という次元の特殊性を複数の角度から浮き彫りにし、そのような現象が発見される度にその周辺を深く掘り下げてきました。しかし未だに満足に分かったと言える領域を確保できていません。4次元の世界で、いつか人間の理解しきれない領域が見出されることはあるのでしょうか？

Topics

●高木レクチャー 小林俊行

2025年10月18日（土）、19日（日）に東京大学数理科学研究科棟において第25回「高木レクチャー」が行われました。

高木レクチャーは、本学理学部数学教室の教授であった高木貞治先生のお名前を冠した定期講演会です。2020年からコロナ禍のために中断していました。

今回ようやく再開できた高木レクチャーは、日本数学会と東大数理の主催、JJMと日仏数学連携拠点の協力で行われました。石毛和弘日本数学会理事長のスピーチで開会し、約160名が参加しました。

アーロン教授（プリンストン大学）

カッセル教授（フランス高等科学研究所）

ウーディン教授（ハーバード大学）

「グラフ符号の理論：問いと結果と手法」

「リー群の離散部分群と固有な作用」

「 AD^* 双対性プログラム、HOD予想とUltimate-L予想」



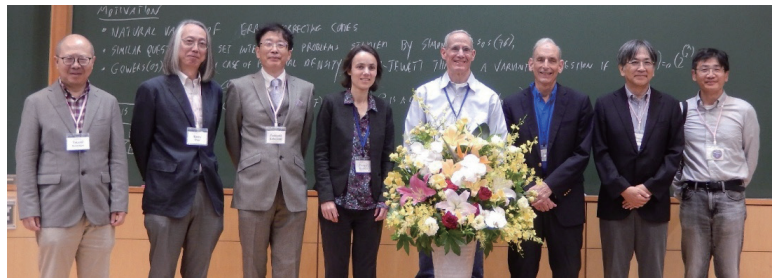
石毛和弘教授



ウーディン教授と酒井拓史教授（座長）

準備と当日の運営では、組織委員（下の写真5名と河東泰之教授）に加えて、中川亜紀さん、吉村明日香さん、ポスドク・大学院生・大学院卒業生や日本数学会事務局の長谷川暁子さんなど多くの方々にも協力していただき、その活動が支えられました。

講演の様子は麻生和彦助教・橋本真吾さん・柴田明秀さんらによる東大数理ビデオアーカイブス・プロジェクトの協力により撮影・記録され、ウェブで公開されています。



左から：熊谷隆教授、小野薫教授、小林、カッセル教授、アーロン教授、ウーディン教授、中島啓教授、斎藤毅教授

【高木レクチャー】

「日本の現代数学の父」と呼ばれる高木貞治の名を冠し、2006年11月に創設された講演会。新たな数学の創造に寄与することを目的に、現代数学の最高峰の講演者を招いて年2回、春と秋に行われる。講演は、その分野の専門家に対してではなく、数学の広い分野の学生・研究者を対象に1時間×2回の形で行われる。

【高木貞治】

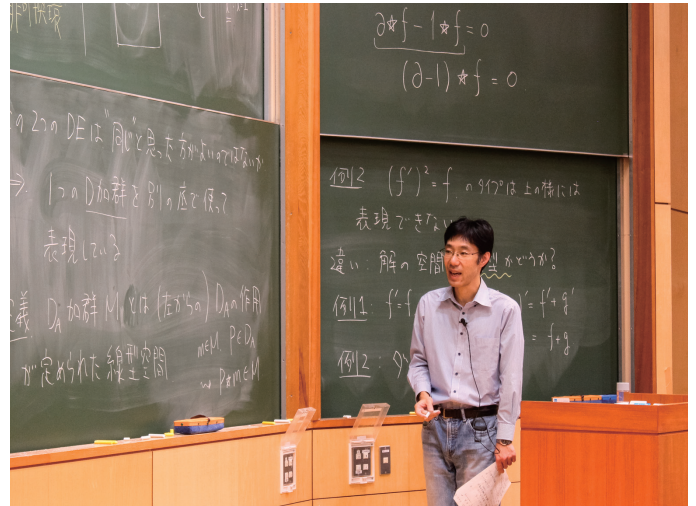
1875—1960。数学者。東京帝国大学卒業後、23歳でドイツに留学。ゲッティンゲンで世界の俊秀たちに出会い、大きな刺激を受ける。帰国後26歳で東大助教授となり、4年後に東大教授就任。代数的整数論の研究で『高木類体論』（1920）を発表、ヒルベルトらの類体の概念を一般化した。「数学のノーベル賞」といわれるフィールズ賞の第1回選考委員（1936年）として世界5人の中の1人に選ばれている。図書室の入口に肖像がある。

●2025年度 公開講座「D加群」 阿部紀行

数理科学研究科の公開講座が駒場祭のさなかの11月22日（土）に行われました。本学数学科の出身者でもある柏原正樹先生が昨年受賞されたアーベル賞の受賞理由ともなったD加群をテーマとしました。当日は156名の方が参加してくださいました。

平地健吾研究科長にご挨拶をいただいた後、池祐一先生による「微分方程式とワイル代数」から始まりました。微分方程式の基本的な議論から始め、微分作用素およびそれをもとにワイル代数の導入を行いました。続いてカブリIPMUの阿部知行先生は「D加群とリーマン・ヒルベルト対応」と題し、ワイル代数をもとに複素射影直線上のD加群を定義しました。また例を中心とした微分方程式のモノドロミーの説明の後、Riemann-Hilbert対応に関する解説が行われました。最後は大島芳樹先生の「D加群の表現論への応用」です。複素射影直線上のD加群を例としてBeilinson-Bernstein対応の解説と、その表現論への応用が説明されました。

D加群の動機からその表現論への応用まで一気に駆け上がるという大変レベルの高い内容でしたが、どの先生も平易な語り口で明快に解説いただきました。公開講座の様子は撮影を行い、現在東大数理ビデオアーカイブにて公開しています。改めて、お話しいただいた先生方と撮影を行っていただいたビデオスタッフの方をはじめご協力いただいた様々な方に厚く御礼申し上げます。



講演の様子（阿部知行教授）

●協賛事業 「数理科学研究科大講義室ネーミングプラン」 —日本生命保険相互会社と協定を締結— 池川隆司 リサーチアドミニストレーター

数理科学研究科では、新たな財源確保、法人等との連携機会拡大を目的に、各種講義室のネーミングプラン（命名権付与）の協賛事業を推進しております。この度、数理科学研究科棟大講義室のネーミングプランへの公募に、日本生命保険相互会社（以下、日本生命）が協賛・応募し、2025年10月1日に大講義室の愛称を定める協定を締結しました。この協定により、大講義室は2025年10月から2030年9月までの5年間、「NISSAY Lecture Hall」という愛称で呼ばれることになりました。

日本生命と本学とは、明治時代から深いつながりがあります。東京帝国大学教授藤澤利喜太郎氏*は、1889（明治22）年に日本生命創立時、日本独自の保険料表作成に大きく貢献しました**。

今回のネーミングプランを通して得られる収益は、主に学生への奨学金に使われます。

* 藤澤利喜太郎氏の肖像写真は、研究科長室前の通路横の壁面に飾られています。



数理科学研究科棟大講義室ネーミングプラン協定締結記念懇談会（2025年9月29日開催）、数理科学研究科長平地健吾氏（左）、日本生命主計部長秋元修氏（右）

** 日本生命保険相互会社, “今日までのあゆみ：創業～相互扶助の精神～1889～1899（明治22～明治32）年” <https://www.nissay.co.jp/kaisha/annai/kigyourinen/ayumi/shashi01.html>（2026年2月25日閲覧）

●広報室の活動について 橋本真吾 広報室

数理のホームページ内からアクセス出来る「数理ビデオアーカイブ」において、過去数理内で開催されました談話会、研究集会、ビデオゲストブックといった動画が視聴出来るようビデオ収録、編集・公開業務を担っています。私は2018年夏からこの業務に携わっていますが、記録に残る動画は2000年あたりまで遡る事が出来ます。

他にもこの5年間は「教育の効率化プロジェクト」の中で、オンデマンド対策のため科目授業を映像に収める業務も進めてきました。また収録だけではなく、数理内のイベントや研究集会などでzoom中継する際、ライブ配信の技術的なコーディネートを担当することもあります。

私たち広報室は先生方へ収録打診をする事もあれば、逆に先生方から収録依頼を受ける事もあり収録素材を増やしていく事がコ



コンテンツを充実させる源泉ともなっています。東大数理が普段どんな事をしているのか？ 数学の研究ってなんだろう？ といった事に対して「見える化」の役割の一端を担えればという思いで業務を進めています。研究の中で動画を役立てて頂く機会があれば幸いです。

近年はソーシャルメディアの台頭により動画制作で広報活動を展開する大学がかなり多くなっていますし、東大内でもYouTubeチャンネルを運用している研究科が多く見受けられます。

●大学院生の活動報告

神田秀峰 博士課程在籍

大学院生として数学の研究に向き合う中で、自分の中に自然と湧いてくる疑問を手がかりに考え続けることで研究が少しずつ進んでいくという感覚が芽生えてきました。とはいえ振り返ってみると、数学の研究は一人で考える時間の積み重ねであると同時に、人との議論や交流の中で広がっていくものだと感じています。

数学科に進学する際のオリエンテーションで、古田幹雄先生は「いろいろな人」がいることを知ること、そして「広義コミュニケーション」を交わすことの大切さについてお話しされました。穏やかながら強く印象に残る語り口で、これから数学を学ぶ仲間たちとともに胸を高鳴らせていたことを覚えています。それから数学を学び続け、この卒業の節目に振り返ると、国境や分野の垣根を越え、まさに「いろいろな人」と「広義コミュニケーション」を重ねてきたと感じます。それは、この数理科学研究科で優れた先生方と志の高い仲間たちに出会えたからこそ得られた経験であり、この環境で学べたことを誇りに思います。

来年からはイタリアで数学の研究を行います。新しい出会いの中で、自分の研究がさらに多くの人へと広がっていくことへの期待に胸が膨らみます。

プラットフォームで使用していた数理YouTubeアカウントをより一般の方にも目にしてもらう機会を増やすため、2025年夏から「東大数理ビデオアーカイブ」としてYouTube検索から直接動画へアクセス出来るようにもしました（こちらは直近数年収録した動画が中心です）。

研究者の方だけでなく、数学に関心のある一般の方たちにもより親しめる動画制作のアイデアを今後も形にしていけたらと考えています。



●2025年度数理懇親会

伊山修

2025年3月27日、ルヴェソンヴェール駒場にて数理懇親会が開催されました。教員30名、名誉教授11名、職員15名の計56名が出席しました。司会は、前半を池祐一准教授、後半をシェーン・ケリー准教授が務めました。会の前半では、今年度の退職・異動者および新任者の紹介に続き、名誉教授の落合卓四郎先生より乾杯のご挨拶をいただきました。歓談の後には、新任の職員および教員よりご挨拶がありました。また、来年度から研究科長が交代することに伴い、現研究科長の平地健吾教授および次期研究科長の辻雄教授よりご挨拶をいただきました。後半では、今年度退職・転出される教員および職員の方々からご挨拶をいただき、花束や記念品が贈呈されました。最後に出席者全員で記念撮影を行い、別れを惜しみつつ閉会となりました。



●昼休みにサッカー

神田秀峰 博士課程

数学科の学生や教員が集まり、昼休みにサッカーを楽しんでいます。経験の有無を問わず、誰でも気軽に参加可能です。運動不足の解消や気分転換にもなり、学年や立場を越えた交流の場にもなっています。専用のSlackチャンネルで日程調整をしているので、興味のある方はぜひご参加ください。



退職教員からの言葉



吉田朋広
大学院数理科学研究科 教授

2019年末から2023年にかけては、コロナ禍により、社会全体がさまざまな困難に直面した時期でもあり、教育研究のあらゆる活動が大きな影響を受けました。数理科学研究科では、2021年に対面による大学院入試を実施しました。三密を避けるため駒場キャンパスの広い教室を使用するとともに、対面試験のバックアップとしてオンライン試験の体制も整えました。専攻長を務めていた際には、教職員の皆様の献身的なご協力（場合によっては健康リスクを伴うものでした）に大いに支えられました。この一例に限らず、これまで教職員の皆様から多大なご支援をいただき、心より感謝申し上げます。

若い頃は事務的な仕事ももう少しきちんとこなせていたように思いますが、教育研究や対外的業務に時間を取られるうちに、いつの間にか臨界点を超え、お問い合わせへの返答が遅れることが増えてしまいました。誠に申し訳なく、この場を借りてお詫び申し上げます。

さて、私事で恐縮ですが、統計の教員が20年以上にわたり一人であったこと、また全学的な統計教育改革の動きに伴って統計関係の講義が増加したことから、これまで相当数の講義や学生指導を担当してきました。多くの優れた学生たちと出会い、共同研究を行えたことは、私の人生において得難い貴重な経験となりました。

一方で、未投稿の論文や、リバイズする時間がなく放置されてしまった論文、さらには四半世紀前に契約したものの未完成のままになっている本など、多くの課題が残されています。加えて、長年取り組んできた統計推測論や確率論の研究はここ数年で大きく進展し

ており、論文としてまとめたいアイデアも数多くあります。データサイエンスの重要性への理解が進む中で、統計数学に対する社会的な期待はかつてないほど高まっています。私自身も、数学の応用先として、計量ファイナンスに加え、機械学習やバイオ統計にも関わるようになりました。

近年、再生医療の実用化が現実味を帯びてきましたが、新しい治療法の効果を検証する際には、従来のランダム化比較試験の枠組みを超える複雑な実験デザインが現れ、臨床統計を支える数学的方法の開発が急務となっています。私たちは現在、因果推論と生存解析の融合に関する研究を進めています。また、バイオ統計の研究チームを立ち上げ、統計数理の開発とその社会実装に向けて、他大学や企業との共同研究も進行中です。

個人的には数学に基づく思考実験をコアとする研究方法をとってきましたが、幸いにも多くの協力者によってその成果が実証され、結果が現場で活用されるようになりました。データに関わる問題を数学的に定式化・抽象化することで、問題の本質が浮き彫りになり、解決の糸口が見えてくることは少なくありません。しかし、その知見を現実の問題解決へと還元するためには、さらに多くの研究が必要です。ほとんどの場合、それは個人で担える範囲を超えており、サポートする組織を含めたチーム型研究の重要性がますます高まっています。研究課題は山積しており、今後はこれらに時間をかけて取り組んでいきたいと考えています。

数理科学研究科で過ごした年月を振り返ると、多くの方々に支えられて研究と教育に取り組むことができたことを改めて実感しております。数理科学研究科の皆様にご感謝申し上げますとともに、今後とも皆様のご発展を心よりお祈り申し上げます。



三竹大寿
大学院数理科学研究科 准教授

このたび、2026年3月31日をもって、東京大学大学院数理科学研究科を退職することとなりました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私が本学数理科学研究科に着任したのは2018年4月であり、在職した8年間、教育・研究の両面において実に多くの貴重な経験を積ませていただきました。着任当初を振り返りますと、前期課程や理学部数学科の授業に慣れ、それらが数理科学研究科の専門教育へとどのようにつながっていくのか、カリキュラムの全体像を把握するまでには、実際のところ3年から5年ほどの歳月を要しました。個々の講義内容は理解できていても、それらが学生の学修の中でどの位置を占め、どの段階でどのような困難に直面するのかを実感として掴むには、時間と経験が必要であったように思います。この過程を通じて、教育とは短期的な成果を求めるものではなく、長い時間軸の中で思考が育っていく営みであることを学ばせていただきました。

本研究科の学生の基礎的な学力の高さには、常に感銘を受けてまいりました。授業やセミナー、研究指導の場において、学生から投げかけられる鋭い質問や独自の視点に触れるたびに、自分自身が知らなかった事柄や新たな考え方を学ばせてもらう喜びを感じてきました。教員という立場でありながら、学生から多くを学ぶことができたことは、何よりの幸運であったと思っております。

さて、着任当初、教養学部報「*時に沿って*」に寄稿の機会を頂き、「悩み多き学生時代」と題して、自身の学生生活を振り返る文章を書かせていただきました。そこでは、「悩み多きこの時期を貴重に過ごしてほしい」という言葉で文章を締めくくっています。まさかその記事を読んだ結果だとは思いませんが、私のもとで学ぶ学部生や大学院生には、進路について深く悩む方が多く訪れるように感じています。その中には、十分な実力を備え、数学を楽しんでいるように見える学生も少なくありません。進路に悩むこと自体は、決して特別なことではありません。むしろ、真剣に学び、自分なりに考えて

いるからこそ生まれる自然な迷いだと思います。数学を楽しめているかどうか、あるいは将来が明確に見えているかどうかは、その時点での価値を決めるものではありません。この文章が学生の目に触れる機会は多くないかもしれませんが、ここに記すことで、現在、そして未来の学生に向けて、何かしらのメッセージが伝わることを願い、今後のために一言付け加えたいと思います。

私自身、「どうして数学者になったのか」という問いに対して、四十代になった今、振り返ってみると、それは特別な才能や明確な動機というよりも、「次を知りたい」という気持ちを重ねてきただけだったのだと思っています。数学の発展は、たとえ小さな一歩であっても、実を結ぶまでに数十年という時間がかかることがあります。一方で、誰かが一つの壁を越えた瞬間に、流れが一気に変わり、大きく前進することもあります。もし、その「壁」を越えるのが自分かもしれないと想像して、少しでもワクワクした気持ちが湧いてくるなら、その感覚はとても大切なものです。そのワクワクを感じられる学生は、ぜひ数学者を目指してください。それだけの魅力がある職業だと思います。

在職中の8年間には、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う教育環境の急激な変化もありました。対面を前提としてきた授業や演習、セミナー、共同研究者とのディスカッションを急遽オンライン形式へ移行する中で、教材の準備や授業方法の再構築には多くの時間と労力を要しました。その後、対面での授業やセミナーが再開されるにあたり、同じ空間を共有し、黒板の前に議論を交わし、相手の反応を感じ取りながら思考を深めていくことの重要性を、改めて強く認識いたしました。数学における理解は、知識の伝達にとどまらず、対話や偶発的なやり取りの中で育まれるものであることを、コロナ禍を経て再認識することとなりました。

研究科の運営や日々の研究生活においては、事務職員の皆様の献身的なご尽力に、幾度となく助けられました。事務職員の方々の支えなくして、研究・教育活動は成り立たないと常々感じております。心より感謝申し上げます。2026年4月からは、早稲田大学基幹理工学部数学科に異動いたします。母校ではありますが、教員の立場として働くには、再び慣れるまでに3年以上の時間がかかるのではない

かと思っております。今後も変わらず、自分のペースで努力を重ねてまいりたいと考えております。

最後になりますが、東京大学大学院数理科学研究科の今後ますます

すのご発展と、学生の皆様のさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。これまで賜りましたご厚情に深く御礼申し上げます、退職のご挨拶とさせていただきます。



北山貴裕

大学院数理科学研究科 准教授

4月より中野にキャンパスがある明治大学総合数理学部に転出することになりました。転出が決まってからは、多くの皆様に急な調整をお願いしてご迷惑をお掛けいたしました。その間にも温かい励ましのお言葉を頂戴しました。これまでお世話になり、また支えていただきました数理科学研究科の皆様へ、改めて深く感謝申し上げます。

振り返りますと、駒場キャンパスには2002年より学生として9年間在籍し、途中出入りはありましたが、数理の教員としても通算11年間にわたってお世話になりました。大学入学の機に出身地である富山から上京して、学びを進める中で数学者を志し、また初めて教壇に立った場所もここでした。

駒場では沢山の方々との得難い出会いに恵まれました。学部生・大学院生の間を通して河野俊丈先生に指導していただき、その後、現職のご縁をいただいて数理に着任した際には、当時研究科長をされていた河野先生から辞令を拝受いたしました。その折の光栄な思いと同時に、職務にあたる責任の重さに身が引き締まる思いを、今なお覚えております。教員の皆さんだけでなく、職員の皆さんにはいつも助けていただいていたばかりで、感謝の念に堪えません。学生の頃からお世話になっていた方も多く、温かく接して下さり、何気ない立ち話の中でも元気をいただいております。学生の皆さんと

も、向かい合い教えるだけではなく、学問に対して同じ方向を向いて物事を考える、私自身にとっても刺激に満ちた時間を共有させていただきました。当たり前のように決して当たり前でない日々を過ごしてきたことを、大変有り難く思っております。

数理を基点として国際的な学術交流を育む機会にも恵まれました。博士課程在学中にドイツに研究訪問した際に輪に加えてもらった欧州の研究グループとは、現在にいたるまで交流が続いています。パンデミックと重なる特別な時期ではありましたが、レーゲンスブルクでの家族を連れての長期滞在を許していただき、その後、オーベルヴォルフアッハに招いてもらい、通常の集会形式とは異なるグループワーク型の合宿に参加したことなどは、研究に新しい方向性の示唆を得るとともに、人生を豊かにしてくれる経験となりました。

駒場を第二の故郷のように思っておりましたので、この節目を迎えながら歩くことが私は好きだったのだと、感慨深く想い起こしております。私が過ごした間も大学の人々や施設環境、学事体制など大きく変わったことはありますが、駒場の根底にある静かで力強く堂々とした風景には、私が学生の頃より感じていた変わらないものがあるように思っております。駒場での皆様との大切な思い出を胸に、新たな環境においても初心を忘れずに挑戦して参りたいと存じます。

最後になりましたが、皆様のご健勝と数理科学研究科の今後益々の発展を心よりお祈り申し上げます。誠にありがとうございました。

受賞

2025.11 河東泰之
(東京大学大学院数理科学研究科 教授)
アメリカ数学会 (American Mathematical Society) のフェローに選出

2025.12 今野北斗
(東京大学大学院数理科学研究科 准教授)
第22回(令和7(2025)年度)日本学術振興会賞
業績題目: 族のゲージ理論と4次元トポロジーへの応用

2025年10月1日～2026年3月31日

新任紹介

向後萌恵

教養学部等経理課数理科学経理チーム
事務補佐員

12月1日付けで数理科学研究科数理科学経理チームに採用になりました向後萌恵と申します。働き始めて1か月ほど経ちましたが、緑のある伸びやかな環境と居心地の良さに日々感謝しながら毎日を過ごしております。主に用度・物品関係の運営費の執行や旅費業務を担当いたします。まだ不慣れな点も多いかと思いますが、ご指導を仰ぎながら、皆様のお役に立てるよう努力してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

大木真紀子

教養学部等経理課数理科学経理チーム
事務補佐員

1月より数理科学経理チームに採用となりました大木真紀子と申します。昨年の12月末まで長く一般企業で就業をしており、このたびご縁をいただいてこちらに勤務することとなりました。駒場キャンパスの緑あふれる環境に出勤するたびに癒しを感じており、この初心を大切に、日々学びを積み重ねる学生の皆さま、そしてご研究をされる先生方のお役にたてるよう精進してまいりたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

柴田明秀 大学院数理科学研究科 広報室 特任専門職員

今年1月より特任専門職員として着任いたしました柴田明秀です。これまでレコーディングスタジオやライブステージにおける音声収録、カメラ撮影、動画・音声編集業務に携わってまいりました。近年はSNS等の動画配信の需要が高まり、特に若い世代を中心に情報収集の手段として動画媒体が主流となっています。そうした状況を踏まえ、動画を通して先生方の価値ある講義や研究活動をより広く届けられるよう、尽力してまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

【教員】

	異動年月日	氏名	新職名	旧職名等
転入	2025.10.15	Tudor Ciprian A	大学院数理科学研究科 特任教授	リール第1大学 教授
転出	2025.11.15	Tudor Ciprian A	リール第1大学 教授	大学院数理科学研究科 特任教授
	2025.11.30	森 迪也	新潟大学 准教授	大学院数理科学研究科 特任助教
	2026.3.31	吉田 朋広	大学院数理科学研究科 特任教授	大学院数理科学研究科 教授
	2026.3.31	北山 貴裕	明治大学 教授	大学院数理科学研究科 准教授
	2026.3.31	三竹 大寿	早稲田大学 教授	大学院数理科学研究科 准教授
	2026.3.31	間瀬 崇史	京都大学 准教授	大学院数理科学研究科 助教

【職員】

	異動年月日	氏名	新職名	旧職名等
転入	2025.12.1	向後 萌恵	教養学部等経理課 数理科学経理チーム事務補佐員	(新規採用)
	2026.1.1	大木 真紀子	教養学部等経理課 数理科学経理チーム事務補佐員	(新規採用)
	2026.1.1	柴田 明秀	大学院数理科学研究科 特任専門職員 (特定短時間)	(新規採用)
転出	2025.10.31	西村 由紀子	退職	教養学部等経理課 数理科学経理チーム主事員
	2025.11.30	杉浦 華子	退職	教養学部等経理課 数理科学経理チーム事務補佐員
	2026.2.28	博田 直美	退職	教養学部等総務課 数理科学総務チーム事務補佐員
	2026.3.31	中村 実	総務部コミュニケーション戦略課 副課長	総務課副課長 (数理科学研究科担当)
	2026.3.31	田中 春美	教育・学生支援部奨学厚生課 奨学チームシニアエキスパート (事務)	教務課副課長
	2026.3.31	高橋 麻美子	工学系・情報理工学系等学務課 専攻チーム<都市工学> 係長	教務課数理科学教務チーム係長
	2026.3.31	佐々木 裕梨	定量生命科学研究所 財務会計チーム一般職員	経理課数理科学経理チーム一般職員
	2026.3.31	山本 和雄	退職	教養学部等図書課 情報管理チーム一般職員
	2026.3.31	古野 博子	退職	教養学部等教務課 数理科学教務チーム事務補佐員

2026年5月発行

大学院数理科学研究科広報委員会

広報委員長：ウィロックス ラルフ

数理ニュース編集局：金子道子 校正：中川久美子